

# 1 なりわい

本章では、加美町で暮らす人々の「なりわい」を扱います。なりわいとは、商店街の小売商や農業、酪農をはじめとした様々な仕事を指します。これらは日々の生活と密接に結びついているため、なりわいのありかたの変化に、まちが変わっていく大きな流れを見出すことができるのです。



# 加美町のなりわい

戦前のなりわいは山の恵みとの間に根付いてきたが、戦後に大きく転換して農業中心の構造になる。70年代に賑わった小売店も、今ではスーパーの進出、少子高齢化の煽りを受けて衰退している。加美町のなりわいは、時とともに様々な形をとってきた。

## 昭和前期（～1940年代）

### 生活に密着した小さな産業

昭和以前の宮崎地区には、林業や炭焼きといった山の仕事の他に、鉱山での採掘業があり、その働き手のための社宅や町営住宅などの住宅地が町を形成していた。湯の倉で採掘された鉱石や石炭は、馬や牛を使って西古川駅まで運搬されていた。産業を通じて、山の恵みとともに生活を育んできた時代だったといえる。しかし、鉱山の閉山と同時に山を介した生活が無くなり、町も衰退していった。

『鉱山には社宅もあつた。掘る人もいるが運ぶ人もいる。だから鉱山では運送業も流行つていたんだよね。事務所には30人ぐらい技術者がいた。色々なところから来て、社宅とか町営住宅とかに住



んでいたんだ。鉱山がなくなつたと同時に、その人たちは次の鉱山に行つて仕事するので、どうといなくなつちゃつた。』（宮崎・50代）

『林業や鉱山だけでなく、炭を焼く人もいた。炭の卸売りみたいな人がいた。品質のいいものに値段をつける市場みたいのがあつたんだよね。都市部では七輪とか炭で料理するわけだからさ。何か仕事といえばすぐ炭焼きだつたね。今の80代前後の人たちは山の恵を大切にしていた。植林して育てる事も炭焼きにして売ることもしていた。キノコも採つた。』（宮崎・50代）

『車はないので、馬や牛を使って炭の集積をしたり、湯の倉で採掘した鉱石を西古川駅までは運んでいました。冬は馬ソリでした。』（宮崎・60代）

当時の仕事には、こうじ屋、豆腐屋、桶屋、焼き物屋といった様々な手作りの産業があつた。子供たちはその様子を興味津々に眺めていたという。

『街角にこうじ屋さん（米、麦、大豆などの穀物に、コウジカビなど食品発酵に有効なカビを繁殖させたもの）があつた。こうじ作っているのが面白くてね。お豆腐屋さんもありますね。お茶碗もつ

て豆腐に醤油をかけて食べていた。豆腐作りが白くてね、ずつと見ていました。ハコちゃんの豆腐がおいしかった。』

『桶屋さんでは桶にたがをかけるのを一生懸命見ていたんですよ。手仕事をするのが当時の遊び方でした。』（宮崎・90代）

『江戸時代終りの方から明治・大正にかけて東北の焼き物を扱っていたんです。かつては生活圏ごとに窯がたくさんあつたんですね。流通が発達して瀬戸とか肥前の焼き物が大量に入つていくところに押されて廃れていきました。』

（中新田・60代）

昭和以前から渓流で麻栽培が行われていたようだ。そんな中で第二次世界大戦を契機に仕事の様子が変わり、加美町の産業は、農業が中心的な役割を担うようになった。お金と土地を持ち、労働者を使役していた農家が力を持つていた。

また、食糧不足で米の価値が上がつたため、米をお金の代わりとして日用品と交換できたことや検査官の家探しから米を守るために、米を色麻に隠して生き延びた苦労など米がいかに大事なものであったかがわかる。

『水芋という地区では麻が栽培されていた。麻つて言うのは結構肥料を使うので、栄養分が運ばれてくる渓流の中州で麻を沢山作っていたと聞いています。明治大正くらいまでだと思いますよ。』

（小野田・50代）

『生まれた頃（60年前頃）は就職先があまりなかつたから、殆ど家の手伝いをしていた。』

（中新田・60代）

『私たちが子供の頃は貧富の差がすごくあった。商店と農家がお金持ちだった。トップクラスの産業が農業だった。農家をやつてる人はみんな金と土地を持つていて、一般労働者はその人達に使われていた。』

（中新田・80代）

『昔は米を国が政府米として買い上げるから作れば作つただけお金になつた。みんな一生懸命つくつていたから耕作放棄地とかないのさ。今は農家では生活できないから、高齢化社会もあって後継者が育たない。65歳以上、70歳ぐらいの人が農業をやつているつていうのはそういうことさ。』

（宮崎・50代）

に牽かせるプラウのこと)をつけて家畜を利用した農業をしていた。それ以外はほとんど手作業でした。手間がかかった。』



『家の周りではお米と物々交換しながらいろんなものを調達していた。お金はもちろんですがお米でも日常用品などと引き換えることができた。』

『子供も多く一・三世代の同居が一般的だった。大家族を食わせてゆくためのお米はお金に替わる貴重なものでした。昭和の20年代・30年代中ごろまでは、お米を生産する農家や農村は今より潤っていたわけです。』（小野田・60代）

『戦時には年雇いが3、4人いたが、そういう人が召集されてしまつて働き手不足になつてしまつた。おふくろも身体が弱かつたから百姓やめてしまつたの。食料不足で検査官がきてしまつた。だから、やさがす（家探し）が来ない日に色麻に隠してもらつて生き延びたのさ。』（小野田・80代）

農家は砂利道を通つて、リヤカーで野菜の販売を行つていた。また副業として、養蚕を行い、岩出山の麓にある絹織物の工場に蚕を売つていたようである。

一方、鉱山業が盛んであつた頃は、鉱山周辺に何件かの住宅があり、権力者もいて、そこが一つの町のようになつていたようだ。

『昭和27年頃まで氷屋をやつていた。その後肉屋を始めた。そのときは木の冷蔵庫で始めたんですよ。氷入れてね。』（中新田・80代）

『今より生活はずつと良かつたね。木炭を売つたり、烟をやつたりして収入源がいっぱいあつた。』（中新田・60代）

『当時は車の交通がなかつたので、農家のひとときはリアカーで野菜を大通りまで売りに来ていました。今では大通りはにぎわいがないですね。』（中新田・60代）

## 昭和中期（1950～60年代）

### 産業の多様化・活性化

昭和中期の初めは日用品が機械化をする前だった。しかし町では機械に頼らずとも、自然とのかかわり合いの中で行われる産業が根付いていたようだ。農業をはじめ養蚕や鉄鋼業などの様子が語られている。

『道路は砂利道だった。その頃は車自体なくて馬車を使つていた。競馬とかで使うようなのじやなくて大きい馬だった。戦前は材木も全部馬車で運んでいた。』（中新田・70代）

『農家は副業で養蚕をして、岩出山のふもとの絹織物の工場に蚕を売っていた。女の子が大勢働いていたね。』（宮崎・70代）

『鉱山周辺は住宅も何軒かあって、おえらいさんもいて、一つの町になつていた。』

『私も少し働いていた。アルミ製の弁当に魚と梅干し入れて。徒步で一時間半かかったから、遅くても夜六時には帰らないといけなかつた。給与は一日320円ぐらいだつたね。俺が17の時だな。』（宮崎・70代）

『鉱山は砂利業が始まるまではやつていたんじやないかな。鉱山はゆうらんどの上の方で、「湯の倉」というところにあつた。』（宮崎・70代）  
『湯の倉には炭鉱、そして赤線があつて、いっぱい人がきたんだ。昔炭鉱やつていた人はまだここに住んでいる。』（宮崎・60代）

宮崎の切込地区では「切込焼」が作られた。現在切込焼は高級なものとなつてしまつたが、当時はみな日常的に切込焼を器として使つていたようだ。

『子供の頃、初午祭の互市に行つて面白いなあと思つたのが、叩き売りだね。例えば食器類。一枚一枚じゃなくて、まとめて売るの。それでもお客

昭和中期の加美町には、戦後すぐとは打つて変わつて、陶器市や瀬戸物販売などの産業が町にやつてきた。



『大昔この辺は「切込焼」が有名だつた。切込焼は薪を焼いて作ったの。今は高級品だけど昔はみんな普通の器として扱つていた。今はほとんど残つてないのよ。骨董品だね。』（宮崎・60代）

さんが買わないと、売る側もやけになつて10枚、20枚つて数を増やしていくつてね。値段の駆け引きをしながら、客と売る方がやり合う。それを見るのが楽しかつたね。』（中新田・70代）

『仙台まで行くのはバスで3時間もかけていった。当時、古川はそれほど大きい町ではなかつた。が個人の土地になり、生活が豊かになつた。商店街は店を開けば物が売れる時代に。物の無い時代に、物があれば売れる。それが30年代です。当時は店を選べない時代だつた。』

高度経済成長期に入ると、物価の上昇にともなつて産業が活性化する兆しが見え始める。また、農地解放により農地の個人所有者が増えて、生活が豊かになつていつた。そのため、商店街は店を開ければ物が売れ、中新田は商人の町として栄えた。商店街

には様々な業種のお店があり、住民の方々は50年以上過ぎた今でも、自転車屋や桶屋、病院、酒屋など、かつて商店街に並んでいた店舗を詳しく覚えている。このように様々なお店があつたので、子供たちは品物の作られていく様子をしげしげと眺めていたようだ。

また当時は商店だけでなく、映画館もあつた。

『私の時代は町の中心街が、すごく綺麗でね。あらゆる業者の商売がいっぱい。中新田は一軒一軒みんなお店が大きくて老舗ばかりです。』

（中新田・70代）

『(当時の西町商店街について)高橋自転車屋さん、桶屋さん、カイロプラティクス、工藤小児科、そして、今藍學舎のところは横山医院だつた。中村豆腐屋さん、岡本酒屋さん、ささえ食堂などは今

でも続いている。(当時の花樂小路について)折原家具屋さん、六角堂というお菓子屋さん。今塾のところは元郵便局で、電報電話局が2階にあつた。

『昭和30～40年代は、物の値段が上がつてもと売り上げがどんどん上がっていった。だから人件費が少々高くても、大丈夫な時代があつたんですよ。商店街にとつては良い時代だつた。活気があつた。』（中新田・60代）

『戦後の食糧難を通り越すと田舎の方も景気が良

黒沢電機屋、タチバナ薬局さんは今もある。（当時の南町商店街について）浅野時計店は元々釣り具屋さんで、ひげの生えた立派なおじいさんがいた。佐藤鉄鋼。金澤八百屋さんでは夏はアイスキャンドイーをつくつていて、冷凍機のアンモニアっぽいにおいがしていた。中治呉服屋さんは今も変わらない。お米屋の鈴木屋さんは味噌醤油もやっていた。結構店がありましたね。』

『みんな店舗を構えて住んでいて、住まいとお店が別というのはあまりなかつた。』

（中新田・60代）

『お肉屋さんやお魚屋さんに買い物に行かせられましたね。よく行つたのは、近所の豆腐屋さん。今は道と空き地になつてしまつたんですけど。朝や夕方に納豆とか豆腐とか油揚げを買いに行つてました。』

（中新田・70代）

『空き地のところに映画館があつた。中新田には一時期映画館が3つあつたんですよ。』

（中新田・80代）

宮崎でも小売店が増え、水飴や試験管ゼリー（試験管の中にゼリーが詰めてあるものをストローで吸つて食べる）といった駄菓子屋を中心とした思い出が多く語られた。子供たちはお小遣いをやりくりして、いろいろなお菓子を買つていたようだ。

また、小売店が増える一方で、まだ舗装されていない足元の悪い砂利道を通り、米や魚を交換しに行商人が訪れていた。冬はソリを引つ張つてきたとう。

『商店街は小さな店がいっぱいあつたし、後継者もいて栄えていたよね。昔のお祭りはスケールが大きかつたですよね。』（宮崎・60代）

『100円を持つていつて一本5円するシャーベット買つたり。「ともこつつかん」つていう、鈴木商店つていう場所。店のお母さんがともこさんだつたから、ともこつつかんて呼んでいた。駄菓子とか売つていて。』（宮崎・60代）

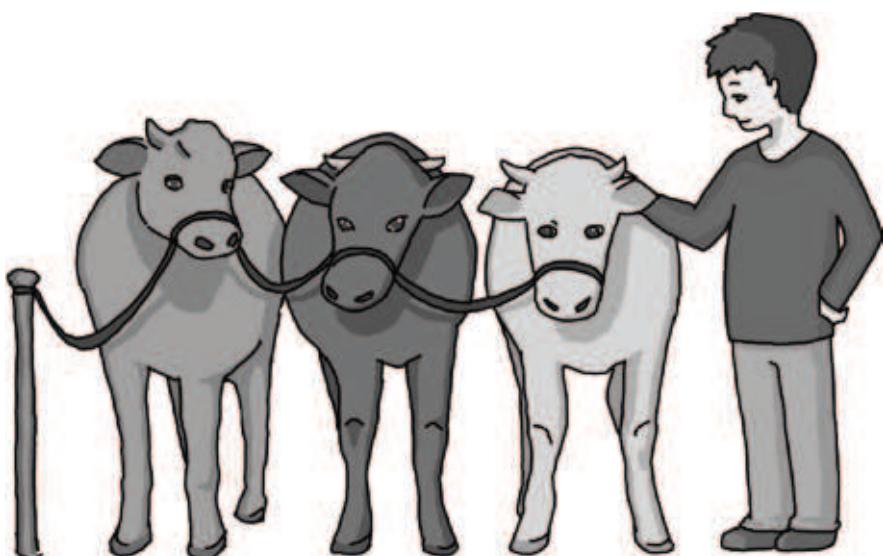
『我々が小さいときには大判焼きやたこ焼きはなかつたの。水飴だな。ゼリーみたいな、試験管に入つた変なお菓子があつた。試験管に、すごい色のゼリーが入つていて、ストローで吸つて食べるの。駄菓子屋はこの辺では「とすけつこや」つて

『言っていた。駄菓子屋のくじに当たる事を「とす  
ける」っていうのさ。』（宮崎・50代）

『行商人は米と魚の交換とかやつていたな。俺たちが小学校の頃は、道が無くて行商人がここには来られなかつた。車は入れなくて自転車で來たりね。冬はソリ引っ張つて來たりね。』  
（宮崎・70代）

当時は小野田・宮崎を中心に、加美町全域で牛、馬などの飼育が盛んであつた。農業においても、馬を使って田を起こす「馬耕」や水を張つて平にする「代搔き」など、牛と馬は重要な役割を果たしていた。そのため、べこ市や馬市などが開催されたようだ。馬市は「おひつ」と呼ばれていて、人がたくさん集まり、まるでお祭りのようであつた。一方で、農業の機械化が徐々に進み始める。

『みんな酪農をして家畜を5、6頭飼つていたよ。酪農を盛んにしようとしてやくらい山を開発したの。株に入つた人は2頭ずつ酪農をしなきやならなかつた。』（小野田・70代）



『昔は酪農家だったから牛乳缶を背負つて町までいくのよ。だから六升缶っていうのを背負つて、

町の中心の集乳所まで毎日父親と行つてたのね。それで生計立ててたんだから。今の子供じや考えられない生活してきたんだね。』（小野田・70代）

『昭和30年くらいになると、乳牛を飼うところがでてきた。当時牛乳は高かつたものですから、搾乳牛2頭か3頭で生活が出来たんですね。毎月現金収入が入るのが助けになつて、初めてまともな生活ができるようになつたんです。そのため畑を牧草地にして、酪農を大きくしていった。酪農をやる家が増えてくると今度は機械化が進み、（高いところに水を揚げる）ポンプが登場したんですね。それから畑をどんどん田んぼに切り替えていった。（田んぼが広い農家は非常に助かっていた）』（小野田・60代）

『当時はほとんどの人が牛を飼っていた。馬よりも多かった。鶏も飼っていたね。小さい時はウサギや羊もいた。羊は毛皮を売つてね、ウサギは食料。』  
『田んぼが機械に代わったのは高校（昭和35年前頃）からかな。昭和37（38年）ぐらいから耕運機に変わった。』（宮崎・70代）

『見込みがある馬を買って来て地元の農家に育て

てもらう。で、育てた馬を引き取つて出荷する。宮崎は馬の産地として盛んな所だつた。』（中新田・70代）

『馬を飼つていた。田起こしや代掻きは馬でやりますからね。牛も飼つていたけど、乳牛ではなく肉牛だつたんですよ。』（宮崎・70代）

『11月の始めに3日くらい「おひつ」という馬市をやつていた。お祭りだから人がいっぱいいた。馬小屋で馬の競市があつた。』（宮崎・90代）

『隣保館（今で言う保育所のこと）で、現在の宮崎公民館の場所にあつた）ではベコ市をやつていた。いいとこの子供たちのお小遣いは100円か200円だな。俺たちの家だと30円から50円だな。水飴とか、綿菓子もあつた。「どん」っていうポップコーンの米バージョンみたいな米菓子も。後は大判焼きとか。』  
『あの頃はガスとか無い。石油コンロだつたな、最初は。』（宮崎・50代）

『手間取り』といって、長く泊まつてその間の給料をお米で換算して払つた。ごはんを食べさせるかわりに、農作業の仕事をしてもらつて、お米を

お給料として渡すの。』（宮崎・70代）

『トランクで生きたまま運んできた豚を屠殺場で屠畜をして、解体していた。50年前には、中新田の旧消防署の近くに屠殺場があつたんだよ。』（中新田・70代）

『朝・昼・晩と忙しかった。子供のころは学校で働くお母さん達はよくうちの店に買い物に来れた。』

『お酒は量り売りで、自分で瓶を持って来て「一合ください」といつたようにして買いにいった。『草刈り鎌が名産で、鍛冶屋さんは5軒くらいあつた。地域と産業というものは密着しているのでわづね。』（中新田・50代）

## 昭和後期（1970～80年代）

### 機械化による産業の変化

昭和後期でも、商店街を中心とした小売産業が賑わっていたようだ。特に中新田では、酒屋や鍛冶屋、駄菓子屋が多く、他のまちから商売人も来て栄えていた。そして子供心に馴染んだ商店街の風景は、現代の加美町の様子と対比的に語られた。

『昔は水屋さんがすごく栄えていた。中新田の町つていうのは商いの町で、商売人が多かった。みんなよそから来てすごく栄えていたんだけど、最近はみんなスーパーにお客さん取られちゃって寂しいですね。』（中新田・70代）

『昔は（旭地区周辺に）縫製工場があつたんだけど、従業員が40人とか50人くらいいて、そこで働くお母さん達はよくうちの店に買い物に来ていた。』（宮城・30代）

『昔は（旭地区周辺に）縫製工場があつたんだけど、従業員が40人とか50人くらいいて、そこで働くお母さん達はよくうちの店に買い物に来ていた。』（宮城・30代）



『駄菓子屋とかは多かったです。今はほとんどないですね。今は子供が入るお店っていうのは無くなりました。25～30年前頃まではまだ残っていました。』（中新田・70代）

『西町の子がよく行くお店、隣の区の子がよく行くお店というのがあった。隣の区のお店に行くのはすごい冒険だった。駄菓子屋はたくさんあった。子供の頃って隣の行政区に行くだけでも違う世界に来た感じ。』

『店主さんが子供の顔を覚えていたり。それが安全安心なまちづくりに一役かっていたのではないかと思う。駄菓子屋は何軒もあつた。』

（中新田・40代）

『（当時の中新田の）裏道にはアイス買えたりとか プラモデル買えたり。そこは子供達にとつてみたらいい通りだつた。』（中新田・40代）

『当時から商店で協力して火伏の虎舞などのお祭りを作っていた。』

『虎舞は商人の恩返しだつた。この町は商業の町として近隣の人人が買い物に来てくれていた。その人達へお酒を振る舞つたりしていた。』

（中新田・40代）

『大量生産・大量消費の時代の影響がそれまでの生活を少しずつ変えていく。農業機械の普及も進み、作業環境は大きく変化していった。』

『昭和40年代は農業が一番活気があった頃。45年になると活気がなくなり始め、大量生産大量消費の時代になってきた。農村も変わってきてね。』

『牛1頭いれば子供を養えることができた。しかし機械が入ってきて1頭が5頭になり、5頭が10頭にならないと採算が取れなくなり、仕事が忙しくなった。でも機械を使わないと70、80までは生きてられないからね。』（宮崎・60代）

『田植機は2条の機械から始まって昭和58年に4条の機械になった。でもまだ本格的なものでなかつたから機械で植えても植え直す作業をしないとだめだった。コンバインは54年頃に入れた。』（宮崎・70代）

『昔は田植えを5軒くらいでまとまって行っていた。牛とかじや時間に田植えに間に合わない。今はジユースにパンとかだが、昔は田植えのどき、おにぎりと濁酒を飲んでやっていた。』

『昔の田んぼは58m×18mの300坪くらいだから。今は120m×40mの5反とかだ。1町歩だと80mだし。』（中新田・70代）

農業や商業の他にも製炭業で生計をたてる人もいたようだ。

『昭和61年に私達は5人共同でミニライスセンターを設立した。私達は個人ではコンバインや乾燥機などは持っていない。農機を共有することは、私の農業経営を非常に助けるものとなつた。』（小野田・60代）

『早苗大会（手伝ってくれた人々を招待して盛んな酒宴が行う）っていうのがあるんだよね。田植え終わってご苦労さんみたい。今でも「さなぶりすつか」っていう言葉は残っている。さなぶりすつかって、仕事終わって酒でも飲もうかとかどうか出かけようかとか、そういう意味さ。』（小野田・50代）

テレビが普及したこと、また農作業の機械化に伴

『30年くらい前、白子田地区では製炭業（薪を焼いて木炭を作り販売する）で生計をたてている人もいた。周りの雑木林で木を刈つてやっていたんだそうです。』（中新田・60代）

い、牛や馬を農業に使うことがなくなつたことで、  
べこ市や戦後の加美町を賑わせた映画館、サークス  
などが廃れていった。

『映画館は昭和50年ぐらいまでやつていたんだ  
けど、テレビの普及によつて廃れてしまつてね。』  
『この辺は市で人がたくさんいてね。森田商店の  
あたりにサークス小屋があつた。サークスの時だ  
けできる小屋があつて、それが楽しみだつたん  
だ。』

『子供向けの上映やサークスのときは授業の一環  
として行つたこともあつた。すごく嬉しかつたね。  
中学になつてあまり無くなつちゃつた。農業機械  
が普及して牛の力で作業する必要がなくなつたた  
め、べこ市もなくなつてね。市が無くなつたこと  
で変わつてしまつたね。』（小野田・70代）

『今は大型店舗があるでしょ。イオンとヨークベ  
ニマル。みんなそつちに流れていつちやうから  
ね。』（中新田・60代）

『イオンが10年前、ヨークが15、6年くらいい前  
にできた。商店街と違つて一つの場所でなんでも  
手に入るし、安いし、サービスも効く。みんなそつ  
ちの方に流れいくからね。』（中新田・60代）

『夕方は商店街の店舗よりもウジエスパーの方  
に人が集まる。他に農協のスーパーもあつたから、  
閉じてしまつたお店もあつた。』（小野田・60代）

『近所に魚屋さん、雑貨屋さんと、昔はもつと店  
があつたんだけど、今はうちだけになつちゃつ  
た。』（宮崎・30代）

平成に入ると、ヨークベニマルやイオンなどの  
大型商業施設が進出し、お客が大型店舗に流れる  
と商店街は大きな打撃を受ける。かつての魚屋や雑  
貨屋、酒屋などは閉店し、徐々にシャッターを下ろ

した店舗が目立つようになつてきた。また駄菓子屋  
など子供たちが立ち寄るお店も今ではなくなつてし  
まつたようだ。そうして商店街の活気がなくなつて  
いった。

## 平成（1990年代）

### 産業の衰退と活性化に向けて

『15年くらい前、大正堂では大判焼きやたいやきを売っていたよね。子供が寄るお店屋さんだつた。』（宮崎・50代）

『今から25～30年前は、駄菓子屋は何軒もあつたが、今では子供が買い物をするようなお店はほとんどなくなつてしまつた。』（中新田・70代）

『商店街でリニューアルしているところはないのでも商店街の風景はここ十何年も変わつていらない。変わつたとしたらシャッターが下りたということ。商店街だつたところが住宅街になつてしまつた。』（中新田・60代）

『店には地元の人も買いにきてくれる。やつぱり地元で愛されるような商売をしていかなきやならないと考えていますね。でも寿命があるためお店の外観や設備は変わつたりします。』（中新田・30代）

また、大型店舗の進出だけでなく、後継者の問題も商店街を悩ませている。空き店舗が増え、駐車場になつてしまふ場所もあり、目に見える形で商店街

の衰退は深刻化している。

『空き店舗はいっぱいある。米の卸屋なんてすごく流行つていたところなのに、後継者がいなくて閉まつていてるし。老舗のお店屋さんも閉めてしまつた。』

『（花楽小路にある）寅やはね、空き店舗だつたところを地域の人たちで管理して、交流の場所として活用している。』（中新田・30代）

『私の隣の店が最近駐車場になつたのですが、始めて自分のお店の側面を見た。今後も数年で閉まつてしまふであろうお店がたくさんある。』

（中新田・40代）

このような現状に対応して、商店街は団結して、地域のためにイベントを企画している。宮崎はナイトバザール、小野田は遊夕市、中新田は花楽市などのお祭りを、商工会を中心として年に数回開催している。彼らは現在直面している商店街の深刻な衰退に対して、商店街の活性化、住民同士のコミュニケーションのきっかけ作りなどを試行錯誤しながら考えている。

また商店街の担い手である商工会青年部も様々な取り組みをしているようだ。

また商店街の担い手である商工会青年部も様々な



『宮崎ではナイトバザールがあるが、小野田の方では遊夕市が女性部によつて開催される。あと中新田に花楽市。』

『遊夕市をやつていて思うけど、お客様がお年寄りばかり。だから子供をステージに上げて親が来るようにするのだけれど、今の30代くらいの親は見たらすぐ帰つちやう。各お店で立ち話の

『今はインターネットも商売に使つてゐる。車の業種では技術料があるが他の業種の人はもつと大変だと思う。こういうのは商工会全体で考えていかないと、生き残れない。』（小野田・60代）

『今のが美商工会青年部は、町の合併と同時にできました。できて丁度10年くらいかな。旧商工会は、中新田町商工会青年部といつて、当時の中新田の大型経営者みんなが入つていてパワーがあつた。イベントやお祭りを企画したり』

（中新田・30代）

『商工会青年部は祭りで地場產品を使つた料理を出しています。例えば加美町産の牛串をオリジナルで作つて皆さんに売つて、地産地消をアピールしたり。』（中新田・30代）

農業の衰退も著しい。減反政策の影響もあって農業での収入は減り、農業だけで生計を立てるのは厳しくなつたため、農家は減少してほとんどが兼業農家となつた。また町を出て行く若者も増えたため、農業後継者も減少している。しかし、田畠の管理な

どの問題もあり、簡単には農業をやめることができないようだ。そのため、今では主に70歳以上の高齢者が農業をしている。

また、戦前から続いている酪農も後継者問題に悩んでいる。

『農業で生活が成り立つのならば小野田に残る人もいるだろうけど……今、田んぼの33%は減反政

策で休耕でしょ。農業で儲ける部分は全くない訳です。そのため子供を教育させて、仙台、東京、大阪に出ていくわね。』（小野田・70代）

『私の住んでいる集落では、専業農家は2件、あとと認定農業者となっているのが4、5件。あとは多かれ少なかれ兼業。』

『昔だったら1町5、6反歩あれば食べていけたんだけど、今は15町歩あつたって生活が厳しいんだ。』（中新田・60代）

『後継者問題がある。田んぼを委託することもできるが、それにも限界はあるからね。イオンやパチンコ屋も出来て、田んぼも減つてきてている。農家だけじゃなくて商店街も大変だ』

（中新田・60代）

『この辺は殆どの人が、自分で食べるくらいの田んぼや畑を持っている。1～2人暮らしになると田んぼも畑も余計になり、余りはあげるって思う。でもみな自分の畑を持っているから、作った作物を結局余して捨てちゃう。でも作らないと雑草とか出てきて、管理が大変になるため、やめられない。』（小野田・60代）

『最初は赤牛つていう牛を飼つて酪農を始めて、子牛を育てて13頭くらいになつた。昔はみんな酪農をしていた。二代目までは親の苦労を見て育つたから、苦労を苦労と思わないが、三代目は難しい。』（小野田・70代）

機械化が普及し農作業は便利になつたが、個人で扱うには経費がかかりすぎるようだ。しかし、共同で機械を購入するも、個人のペースで農作業ができなくなるという問題があるという。一方でこのようないい状況の中でも、集落共同で営農をする試みが行われているようだ。

『機械はえらい経費かかっているね。共同購入をすればいいんだけど、なかなか難しいんだ。』

『本当は共同利用をすればいいんだけど、できていないね。こういう仕事つて一齊に行うから日程

が被る。やりたいときにやれない訳さ。』

『誰かに土地を任せてもいいんだけど、誰もいな  
いんだよ。一枚100000m<sup>2</sup>だったら誰か引き受  
けてくれるかもしれないけど。』（中新田・60代）

『私の住む集落では、種子乾燥は全て一ヶ所でや  
る。コンバインも6条刈りのやつ4台を共同購入  
している。作業も全部組織で決まっているの。作  
業効率もいいし、それから機械が高いからコスト  
面でもだいぶ助かる。何年か前からこういう事を  
やつてている。』（小野田・60代）

現在農業が衰退している状況に対しても、今までの  
ように農協に販売を委託するのではなく、インターネット  
で通信販売をするなど新しい農業のあり方を  
試みる人たちもいるようだ。中には「有機米」を作  
り、自然栽培を楽しんでいる農家もいる。

『自分で力がある人は、得意先を見つけるとか。  
インターネットで通信販売をしている人もいるだ  
ろう。自分で販売できる力のない人は、手数料を  
払って農協の方に委託しています。』  
(中新田・60代)

『有機米を中心いています。今では肥料も農

薬も使わない自然栽培を5年前から行っています。これが面白くてしようがない。我々はお金よりも、自然栽培で楽しんで生活できればいいのかな、という考え方を持つています。皆様に貢献できたら嬉しいですね。』（小野田・50代）

ものづくりに携わる人々からも、町の活性化へ向  
けた積極的な活動が行われようとしている。

『現在、町、陶芸家、いろいろな面でうまく噛み  
合っていない感じがします。現在焼き物を作つて  
いる人達がどんな物を作っているのか、などにも  
興味を持つていただけたらと思います。ものづくり  
は表現でもあります。環境や心境の変化と共に  
作る物もやはり変化するものです。』

『まちと一緒に企画や展示を行い、協力しあえる  
関係になれればとは思います。』（宮崎・60代）

ここまで「加美町のなりわい」の様子を確認して  
きた。加美町のなりわいは、もともとは山の恵みと  
の間に営みが根付き、手作りの商業も栄えていた  
が、第二次世界大戦で大きく転換して農業中心の構  
造になつた。

さらに昭和中期後期では、加美町の商店街が小売  
産業で賑わっていたが、平成初期に大型スーパーが

進出し、さらに少子高齢化、若者のがん離れなどの影響を受けて、徐々に衰退し始めたといえる。しかし同時に、現代ではその状況を開拓すべく様々な活動が行われているようだ。

以上が「加美町のなりわい」としてまとめられる。

